

— 書 評 —

John H. Goldthorpe
David Lockwood
Franck Bechhofer
Jennifer Platt

The Affluent Worker (3 vol.)
vol. 1 Industrial Attitudes and Behavior (1968)
vol. 2 Political Attitudes and Behavior (1968)
vol. 3 In the class structure (1969)
(Cambridge University Press)

小 関 藤 一 郎

I

「ゆたかな労働者」The Affluent Worker と題するこの三巻のシリーズはゴールドソープ J.H. Goldthorpe およびロックウッド D.Lockwood を中心とする英国の社会学者たちの手になるもので、第一の書は英国のゆたかな肉体労働者の職業生活に対する行動と態度を、第二の書は彼等の政治に対する行動と態度を、第三の書は全体的な包括を行いながらゆたかな労働者の階級意識、階級に対する態度などを扱っている。これらはケンブリッジ大学の社会学研究双書として1968年から1969年にかけて刊行されたものである。「ゆたかな」affluent という用語が最近の社会生活の形容詞として用いられたのはおそらく1958年に刊行されたガルブレイスの著書「ゆたかな社会」Affluent Society にはじまるのであろうが、英国においてもすでに1961年 F.Zweig が「ゆたかな社会における労働者」The Worker in an affluent worker. を書いている。Zweig によってとりあげられた対象とこの三つの著作でとりあげられている対象は一部分は合致しているが、Zweig の場合はゆたかな社会において労働者の生活かどのような影響をうけているかに焦点をあてているのに対して、この三つの著作ではすでにゆたかとなっている労働者が職業、政治、階級等に対してどのように考え、どのように行動しているかを明かにすることに焦点がおかれている。ところでゆたかな労働者ということが何故とりあげられたのか。これについて著者たちはそうした労働者たちはブルジョワ化してきているのではないかという主張の妥当性、あるいは正当性を検討しようとするためであるという。すなわち、1950年代以降欧州でも急速に経済成長が進展し、福祉国家政策も漸次実現されていくにつれて、労働者の賃金は

著しく増大し、その生活水準も大いに改善されていったため、労働者の生活慣行や態度も変化し、労働者の生活は中産階級化してきているのではないかという見解を検討しようというものである。そして著作者代表の一人 Lockwood は上述した F.Zweig の論文「新しい工場労働者」に対するコメントを行って次のような批判的見解をのべている。⁽¹⁾労働者の生活水準が向上して漸次中産階級に接近しているということは次の三つのことを意味する。(1)労働者は多くの耐久消費材などの所持品を購入するようになり、今ではその水準はかつての中産階級のそれと同じ程度になってきている。(2)その結果労働者は中産階級的な新しい価値、規範あるいは標準を身につけてきている。そのことは労働者が自分たちの地位に対して行っている評価や政治的態度に明かに現れている。(3)新しい労働者たちは中産階級の人々から社会的に対等者として交際を認められるようになっていく。ところで以上の三つの命題の間に当然因果関係があるとは考えられない、それは事実によって立証されるべき仮説なのである。だからもしそれが証明されなければ新しい労働者という立論は充分な根拠をもたなくなるであろう、と Lockwood はいう。このような意味での検証を行うのがこの著作の目的なのである。だから「ゆたかな労働者」ということは別の言葉でいえば「新しい労働者階級とは何か」という問題に還元されることができる。そしてこの問題は英国ばかりでなく、フランスでも取上げられている問題であって、ある意味では産業社会の基本的問題にもふれるものである。⁽⁴⁾その意味においてこの三つの著作は今日的意義の大きいもので、しかも産業社会と階級という中心問題に対する大きな挑戦であるともいえるのである。ただ同じ新しい労働者の問題をとりにあげても、英国の場合においては、上述したようにそ

(1) F.Zweig "The New, Factory Worker," Twentieth Century 1960.

(2) D.Lockwood, "The New Working Class", Archives européennes de sociologie 1960. n.2. p. 251.

(3) D.Lockwood, op. cit., p.259.

(4) フランスにおけるこの問題の出発点となったのは雑誌 Arguments (1959, Jan-Mar) 特別号「フランスの労働階級とは何か」Qu'est-ce que la classe ouvrière française? でこれについて多くの論争がおこなわれた。

の中産階級化が問題とされたのに対して、フランスの場合に問題となったのはオートメーションなどの産業技術の高度な発展に伴って新しい知的技能を身につけた労働者の出現であって、たとえばマレ S. Mallet はそうした技能水準の高い労働者たちが今までの半熟練労働者よりは高い責任を自覚しているとともに企業の主脳者に対してより効果的な抵抗手段をもってきていることを指摘している。いずれにせよ経済成長下の産業社会における労働者の生活に從來予想されなかった著しい変化が生じてきていることは否定できない事実である。ただそうした経済生活水準の向上が労働者の生活様式や階級上の地位などにどのような影響を及ぼしているかは実証されなければならない点である。それを試みたという点でこの一連の著作は大きな意義をもっているといえるであろう。

II

ところでゆたかな労働者について上述したような問題を検討するためには、その目的に適した対象を選び出さなければならない。著作者たちはこの対象をルトン Luton という新興工業都市——それは従来の工場施設のある場所からかなり隔った全くの新しい工業団地につくられたものである——における工場労働者に求めたのである。これらの労働者は(1)工具製造工、据付工、その他修理工場の技能工を含む高度技能工 (highly skilled) (2) 技能度の高い半熟練工 (relatively skilled) (3) 普通の流れ作業などに従事する半熟練工 (主として組立工) から構成されている。対象にはオートメーション工場における監視作業従業者は含まれていないことは注意されなければならない。上述の労働者が選ばれたのは彼等が伝統的な工業地域に居住していないのと所得が月額80ポンド(8万円)あるいはそれ以上に及んであり、調査当時(1962—63)当時としては英国の労働者としては生活水準の高い部類に属しており、未来を代表する労働者に適わしいと考えられたためである。これらの労働者についてなされた面接調査の結果の主要点を次にみていくことにしよう。

1. 職務に対する態度—彼等はみな現在の工場で働く以前に他の工場や会社で働いた経験をもっており、現在の仕事が高い所得をもたらすという利点にひかれて移動してきたものであるため、当然のことながら前職に比べて現在の職務に対してかなり強い愛着をもっていることが明かに見られる。ところでその理由についてみると技能度の高い労働者においては仕事そのものに伴う内的報酬(技能がいかせるとか、自由に腕がふるえるなど)を

第一にあげているが、半熟練ないし熟練度の低い労働者はむしろ高い賃金といった外的な報酬を第一にあげているものが多い。そして彼等は一般に他の仕事に変わりたいとは考えていない。これについて組立工を除いて大部分は圧倒的に否定的な回答を示している。しかしこれらゆたかな労働者の仕事に対する満足と現在彼等がはたらく企業に対する満足との間に相関関係が存在していると思われる証拠はない。彼等の仕事に対する満足は圧倒的に経済的な考慮つまり高い賃金にもとづいているようで、彼等が現在の仕事をつづけたいという理由の中もっとも頻度が高いし、そのほか仕事の安定、臨時手当の大きいことも大部分の労働者にとって重要な意義をもっている。これに対して仕事そのものの面白さなどの内面的特質は熟練労働者、の29%半熟練労働者の14%によってあげられているにすぎない。しかも彼等が現在の仕事については食うために止むを得ずというのではなく、むしろ彼等自身の選択によってきめられている。しかし彼等はごく少数の例外を除いて仲間との連帯意識をもってはいない。これは一部分は技術的条件によるものであることは否定できないが、それよりも彼等の大部分は現在の仲間と離れて仕事をするようになって、給料がかわらなければそれに余りあるいは全く煩らわされることはないためである(熟練76%、半熟練66%)。仕事以外の生活でも仲間との関係は余り大きな比重をもっていない。つまり彼等にとって仕事以外の生活で一番重要なのは家族との私生活を享受することなのである。高い給料はそれを可能ならしめる手段であって、それを保証してくれる限り現在の雇用主である企業に対して満足しており、しかも彼等はほとんど大部分は企業との関係は非人格的、契約的なものではあるが、将来においてもなお彼等に高い給料を支払うことができると見ている。こうした打算的な考慮と両立するかのように彼等は仕事に基づくクラブや団体には積極的に参加はしていない。また彼等の87%は労働組合員であるが、このうち現在の仕事につく前から労働者の義務として組合に加入したのは20%しかいない。そして組合の活動に対する労働者の参加も職場段階のものにおいてかなり活発であるが、正式の支部活動に対しては極めて消極的である。つまり組合活動に対する参加もまた手段的であって、労働者の連帯意識を示すものはほとんどないといってよいのである。彼等の大多数はまた経済の将来に対しては経済成長がつづき雇用の安定と生活水準の向上が断絶しないことを期待している。そして職長への昇進ということに強い関心をもつも

(5) S. Mallet, "La nouvelle classe ouvrière en France", Cahiers Internationaux de Sociologie, 1965 vol. XXXVIII, p. 65—66.

のは熟練労働者と相対的に高い技能の半熟練者で29%、一般の半熟練者では19%しかない。職長への昇進のために積極的にはたらきかけたものは8%しかない。また今の仕事をやめて早く自営の仕事をしたいと考えるものも全体の25%しかない。彼等が現在の仕事に留まっているのは仕事本来の楽しみ、自主性ということではなく、給料がよいから、楽しい家庭生活がおくれるからというのが最もよい動機である。

2. そこでゆたかな労働者のこうした仕事に対する志向、家族生活中心的、孤立的(非連带的)、金銭本位的態度は一体どのようにして生まれ、維持されたのであろうかという難しい問題が生じるのである。これに対して著者たちは、伝統的労働者のそれとは著しく異なる彼等の仕事に対する極端な手段的態度は一定の社会的関連において理解すべきものであると見、その要因として次の諸点をあげている。(1) 第一に家族周期からみた彼等の地位、つまり大部分(86%)が一人またはそれ以上の子供をもった家庭の責任者で家計上の重い負担を双肩になっている年代の人々であることがあげられる。彼等が前の仕事をやめて現在の仕事を求めて新しい土地に移住してきたのはそうした彼等の要求に応ずる給料その他物的報酬が得られるためにほかならなかった。また彼等が組合活動その他社会的活動よりも家庭に対する関心を特に強く示しているのも彼等が家庭で父としての責任が重くそのエネルギーもこれを果たすために向けなければならないことにもよるのである。(2) このほか彼等の生活において特に関連して注目されなければならない要因は彼等の地理的および社会的移動である(geographical and social mobility)。地理的移動についてみると、彼等は上述したように職業上でも家族的にも仲間との交際も余りしないが、そればかりでなく親戚との交際も余りしていない。それはルトンの市へは親戚などと別れて移住したためである。友人も親戚のない土地へ移動してきたため彼等は家庭中心的な生活を送らざるを得なくなっている。この点で彼等は永く生れた町に住みついている伝統的労働者と異っているのである。彼等の地理的移動と彼等に極めて顕著な手段的職業観は直接間接大いなる関連をもっていると思われる。更に社会移動について見ると、地理的移動ほど関連は強くないが、それでも彼等の中には、下降移動を経験したものが相当数含まれていることが注目される。例えば熟練労働者の場合には父親が肉体のものは80%もあるが、半熟練の中機械工と組立工では非肉体とくにホワイト・カラーを父親にもつものが多く(機械32%、組立工19%)、とくに機械工の場合は父親が肉体のものは42%しかない。更にまた彼等はその職歴においてもホワイト・カラーを経験したものがかなり多く、機械工の中半数以上は過去にお

いて非肉体的職業を経験しているのをはじめ半熟練グループでは30~40%が同じく非肉体的職務を、また熟練労働者でも20%は過去において非肉体的職務を経験している。こうした点からみると彼等にはかなり下降的移動の経験者があることは明白である。そしてそうした移動も彼等の手段的職業観とも相関する所が大であると見られるのである。そしてそのため著者たちは手段的志向のスコアを作製し、それと下降移動との強い相関関係を立証している。

3. こうした調査結果の分析のあと著者は理論的考察も行なっている。そこで論じられているのは人間関係 Human Relations の接近に関する批判と Blauner の著作などでとられている技術発展を独立変数として態度を従属変数とする見方に対する批判とである。人間関係論の見解によると、人間は仕事において経済的要求の充足を求めただけでなく、承認、同意、地位などの社会的(対人的)要求を満足させることを欲するという。だからその説に従うとそうした社会的要求が満足させられないと人間は心理的に苦しんだり、企業組織の効率が損われるような病理的状況がおこることになるのであるが、著者たちの調査により実証されたところによると、要求とか期待は単に心理的なものではなく文化的に決定される変数である。したがって、具体的な作業状況における労働者の態度や行動を理解するためには、労働者のもつ要求についての一般的仮説からはじめるのではなく、その状況において支配的な労働に対する志向の分析からはじめることが必要である。だから著者はゆたかな労働者の手段的な職業観——それは人間関係論からいえば病理的現象であるかもしれない——から出発して分析を行ったのである。著者は人間関係論の接近法は元来古典経済学の強い個人主義的強調や同じ考え方立つ初期の産業心理学に対する批判としてはじまったもので、しかもそれはメイヨーの「現代社会が分解したアノミーの状態にある」という見方に強く影響されたものである。現代社会にはアノミー的なものが含まれていることは事実であるが、全体として現代社会はむしろかなり適応的で、現代人も意義ある社会的活動を全く奪われているわけではない。そうした点から人間関係論の普遍妥当性に対する批判がなされている。技術が態度決定の重要因子と見る接近法に対しては、技術的組織が現場の作業における相互作用の型に重要な影響をおよぼすことは事実であり、それは連帯的作業集団の形成を阻止したりすることは明かであるがこの調査でみ限り、技術的に条件づけられた作業状況における労働者の職務経験と彼等が従業員として示す態度、行動との間には体系的な連関はみられない。そのことは技能度の高い労働者と半熟練労働者との間に見られる差が技術的要因によって決定されるとは

断言できないことによって明かであるとされる。それ故に技術要因を独立変数とする説明のもつ価値は減少するのであるという。ただ著者たちは、従業員が共同でもっている仕事に対する志向 orientations は工場内の状況については重要変数として扱うことが必要であり、この試みは近代産業における労働者の態度、行動を説明するのに役立つ公算が大であると考えている。

III

次に政治的態度についてみることにする。政治的態度に関する著作では調査の主題となったブルジョワ化の仮説は全く否定されている。つまり現在のゆたかな労働者の意識態度にはブルジョワ化過程は全く見られないのである。同じことは階級構造との関係においてみたゆたかな労働者の生活についても見られている。そこで以下第二、第三の書をまとめてみていきたいが、まずこれら労働者の投票行動についてみると、全体的にホワイト・カラーに比べて労働党への投票率は高い。そして彼等の労働党への支持は労働階級に属しているという意識⁽¹⁾という要因にもとづくものであるが、そのほかに労働党の福祉的政策、家族の伝統といった要因もかなり強くはたっている。だから彼等にとっては労働党は労働者としての彼等の利益をよく守ってくれるものと考えられているのである。しかし上述したように彼等は仕事に対してもまた労働組合に対してもきわめて明瞭な「手段態度を示しており」その組合加入または支持は組合が彼等の生活水準の向上に役立つからであり、社会構造の改革を実現してくれるからなのではなかった。だから労働党支持という政治に対する態度と生活水準向上のためにとる活動、態度とは分離しているのである。それで労働党支持にもかかわらず、仲間なり、親戚なり、親しい人々と政治問題を論じたことがあるかという問いに対しては60%までが否定の回答をしている。そうしたことからみて、ゆたかな労働者にとっては政治は会話の重要話題ではなくなっていることが明かとなってくる。だから労働党に対する支持も厳密に検討してみると、支持の理由としてあげられているものには労働党が労働者階級のための党だという回答は多いがその中には労働党の政策が他党のそれよりも生活水準を向上させてくれるからだ⁽¹⁾と見るものも相当数あり、また次の選挙に労働党に投票するといっている労働者にはその理由として経済的利益をもたらすからという理由をあげているものが多い。それ故に、彼等の政党支持も手段的見方 instrumentalism と無関

係ではないのである。ただ労働者のうち比較的所得の高いもの、自分の住家をもっているもの、他の人に比べて過去10年間に生活水準が向上とした考える人々はそうでない人に比べて多少労働党支持率は少い。それでこのことは一応ゆたかな労働者のブルジョワ化を裏書きするようには見えるが、実際にその差は近少(2~3%)であってゆたかな生活は労働党支持と両立しないということ⁽¹⁾を明白に立証するにはいたっていないのである。そればかりでなく、ゆたかな労働者は生活水準の著しい向上にも拘らず、日常の仕事では労働者としての生活には変化がなく、経営主脳たちからは遠くはなれ、指導権ももたない⁽¹⁾ため、また将来労働者以外の職業に昇進する可能性も余り多くないことが明かであるから、彼等が労働者としての意識をなくし⁽¹⁾くし⁽¹⁾得ないのは当然である。彼等は伝統的な労働者よりはるその労働者意識は弱いかも⁽¹⁾もしれないが、それを全くなくなしているわけではない。そうした点からもブルジョワ化の過程が顕著に現れているとはいえないとされる。

更に階級という問題を考えるためには、労働者と中産階級との間の社会的交際がどの程度に行われているか、ゆたかな労働者がどの程度中産階級に統合されているかを明かにしなければならぬ。その点は第三の書階級構造において詳細に論ぜられており、その点からもブルジョワ化説は否定されているのである。その要点をまとめてみると次のようである。(一)産業技術の発達は労働者の職務にも多くの変化をもたらす、その生活水準を著しく向上せしめてきていることは事実であるが、高い技能を要する仕事は減少し、中程度の技能をもつ労働者にとっては高い賃金を得るためにはかなり不快な仕事をしなければならぬ⁽¹⁾ことが多い。また交替勤務などもあるため職務外の生活が影響をうけることがある、そうした点でホワイト・カラーとの差はなくな⁽¹⁾ってはいない。

(二)労働者の生活がゆたかになり、住宅が中産階級的な地域につくられても、そのことによって労働者は自動的に中産階級に統合されることはない。労働者とホワイト・カラーとの交際はきわめて少い。これにはホワイト・カラー側の排他性も作用しているが労働者の家庭中心的生活も大いに作用している。(三)ゆたかな労働者は願望水準がホワイト・カラーとかなり異⁽¹⁾っている。彼等は高い物的生活水準に対しては強い動機付けをもっているが、社会的地位上昇の願望は伴⁽¹⁾っていない。そうした地位上昇の願望を見せているのはほとんど妻がホワイト

(1) 労働者 ホワイトカラー	労働党			保守党		
	1955	1959	1963	1955	1959	1963
	83	80	79	15	16	14
	32	30	32	55	55	58

・カラーであるとか、かってそうした仕事についていたなどの経験のあるものだけである。そうした点からいわゆるブルジョワ化の理論は今日の英国社会においては認められないという結論が出てくるのである。しかしそのことは労働者の生活水準の向上が少しも実現されていないということの意味するのではない。著者によると、階級の両極分解の傾向は全く認められないし、労働者の生活水準が上昇してきていることはもちろん明白に認められる事実である。しかしそれから直ぐ階級的な障壁が全くなくなってしまった、あるいは全く中産階級化してしまったということは断定されないのである。このことは階級の問題の解明の上においても極めて重要な意義のある発見である。またそうした労働者のブルジョワ化の理論の証明を試みたこの著作は単なる調査研究である以上に産業社会学の根本問題に対しても多くの寄与を与えてくれている。

上述のように示唆するところの多い、しかも興味あるこの著作に対して筆者が若干問題であると考えた点を最後に指摘しておきたい。第一はここに選ばれた対象は英国における近代的産業に従事する労働者であり、それは現在よりはむしろ未来を代表するものとしてとらえられている。そしてその中には熟練、半熟練労働者が含まれているが、石油産業などの高度のオートメ化した産業における労働者たとえば監視作業に従事する労働者は全く含まれていない。地域をルトンの町にとったためにそうした労働者は含まれなかったのかもしれないが、ゆたかな労働者の代表としてはもっとそうした労働者をサンプルの中に加えるべきではなかったかという点があげられる。オートメーション化は今後もっと進んでいくと考えられるから、監視作業の問題は重要である。また組立工などの仕事も将来もっと変っていくことを考えると対象の選択にも少し配慮がなされなかったのかと考えられる。要するに、対象の選択がもう少し工夫がほしかったと考えられる。

(2)
第二、著者が第一の書で人間関係論的接近法などを批判している点は特に興味深いものがあり、そこで提出されている職務、仕事に対する志向が労働者の態度によって決定的な重要性をもつという主張は注目をひくものであるが、その志向と態度との関係についての理論的説明は充分ではないように思われる。その点もとくにふれて貰いたかった点である。しかしブルジョワ化の主題をこうして調査によって検討していった企画は重要な意義をもつものであり、その努力に対して敬意を表明しなければならぬ。とくに第三の書の最初の章に要約された、

マルクス主義階級理論がいかなる点で今日容認されにくくなっているかを明かにした解説は極めて有益であるところであろう。この書は英国における試みであるが、色々と文化的状況、条件の異なるわが国における近代的工場労働者の最近の状況はどうなっているのかが関心のもたれるところで、この書での試みを参考にすれば有意義な比較調査がなされるであろう。

脱工業化社会といわれるが、そうした新しい段階における労働者の生活、態度はどうなっているかについて、この三冊の著書は極めて有益な示唆を与えてくれている。

(2) この点については M.Maurice と Michel Arliand も指摘している。cf. Une critique de le thèse de l'Imbourg de la nouvelle classe ouvrière, *Sociologie du Travail* 1970 n.1. p.74—86.